様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００１９５

研究課題名（和文）江戸・明治期の肉筆雛形本（小袖・着物注文用模様見本帳）の所在及び実態に関する研究

研究課題名（英文）Study on whereabouts and existing situation of handmade in Edo period

研究代表者
長崎　巌（Nagasaki, Iwao）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：２０１５５９２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代において小袖を注文する際に、小袖の模様を選ぶために用いられた肉筆の小袖雛形本、型染見本帳、色見本帳は、当時最新流行の色や模様、染織技法を知ることができる資料として、江戸時代の小袖の様式変遷を明らかにする上で非常に有効な資料ということができる。本研究は、肉筆の小袖雛形本及び型染見本帳、色見本帳の現時点における所在（所蔵者）と、それらの書誌学的内容を明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
江戸時代において、小袖を注文する際に、小袖の模様を選ぶために用いられた肉筆の小袖雛形本、型染見本帳、色見本帳は、当時最新流行の色や模様、染織技法を知ることができる貴重な資料である。本研究では、江戸時代後期から明治時代にかけて肉筆雛形本、型染見本帳、色見本帳について、その所在を明らかにしたうえで、その内容を調査し、データベース化して人々がこれを活用できるようにした。

研究成果の概要（英文）： In the Edo period, when ordering a kosode, the kosode sample book, the stencil dyeing sample book, and the color sample book were used to select the pattern and technique for the kosode. It can be said that it is a very effective material for clarifying the changes in the style of kosode during the Edo period. This research clarifies the current location (owner) of handwritten kosode sample books, stencil dyeing sample books, and color sample books, and their bibliographic contents.

研究分野：日本染織

キーワード：肉筆雛形本　色見本帳　型染見本帳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者は長年に渡り、近世における小袖服飾の美術史的研究を行ってきたが、近年は呉服注文・制作の具体的プロセス、及びこれに用いられた小袖雛形本や注文控、注文台帳、仕様書、納品書、請求書などの使用実態に注目して研究を行っている。

こうした中で、顧客が小袖の発注を思い立ってから、呉服業者との間でどのようなやり取りを行いながら具体的な呉服注文に至るのか、また制作される小袖の仕様決定のプロセスでどのような資料やサンプルが用いられるのかが明らかとなった（「江戸時代における呉服注文プロセスに関する研究」『共立女子大学家政学部紀要』第63号・共立女子大学・2017年1月、「江戸時代初期における武家女性の呉服注文関連資料と呉服注文の実態―慶長七年(1602年)『御染地之帳』の記述からわかること―」『総合文化研究所紀要』第24号・共立女子大学・共立女子短期大学・2018年2月）。

一方、呉服業者は、受注後具体的にどのような手順で商品の制作にあたり、その際にはどのような書類や台帳、仕様書が作られたのか、また商品完成後は顧客との間にどのような書類のやり取りがあったかなども明らかにした（「呉服商雁金屋の会計文書が示すもの―上流武家の呉服注文に関わる顧客・呉服商間の会計処理について―」『共立女子大学家政学部紀要』第64号・共立女子大学・2018年1月）。

また『学術研究助成基金助成金基盤研究C「小袖雛形本・型染見本帳・色見本帳等の所在及び現存状況に関する研究」（2016～18）』においては、小袖服飾の様式変遷の把握において決定意的資料といえる小袖雛形本の重要性に鑑み、これら資料が研究者の間で広く活用できるように、現存するそれらの所在と現存状況を明らかにすることを目的に、調査、分析を行うとともに、それら資料のデータベース化を図った（『科学研究費助成事業研究成果報告書』2019年6月において小袖雛形本の所在と内容を報告済み）が、この調査研究の過程で、肉筆雛形本の所在についての多くの情報を得ることができた。

肉筆雛形本は、そもそもそれがどのような目的でいつ頃制作されたのかが、一般には知られておらず、また版本でもないため、図書館等でもこれを正しく分類し、書籍目録に適切に掲載していない場合が多い。また概して染織業者などが所有している場合が多いが、上記小袖雛形本の現地所在調査の過程において、関連資料の中にこれらがしばしば含まれていることを確認することができた。

肉筆雛形本は、これまでは版本の小袖雛形本の陰に隠れて、その存在に研究者の関心が向けられていなかったため、先行研究はないに等しく、所在が知られている肉筆雛形本もごくわずかしかない。前記科学研究費を得て行った調査において、それらが様々な所蔵者のもとに分散して伝存していることが分かったほか、年記を持つものも多くはないが存在しており、小袖雛形本が研究に利用できない江戸時代後期から明治時代にかけての女性の小袖及び着物の実態を知る上での非常に重要な資料であることが再確認できた。

肉筆雛形本は、図書館や博物館などの公的機関に収蔵されているほか、旧呉服屋系のデパートや呉服商、染織関連業者などにも、ほぼ死蔵のような状態で保管されている。本研究により肉筆雛形本の所在とその個々の内容が明らかになれば、江戸時代後期から明治時代中期にいたる小袖・着物の歴史的・美術史的研究に大いに寄与できると考えた。

２．研究の目的

前に述べたように、肉筆雛形本は江戸時代後期から明治時代にかけての小袖・着物を中心とする和装の歴史的・美術史的研究に非常に有益であると考えられるが、その所在や内容に関する実質的研究はまったく行われていない。そこで本研究では、肉筆雛形本についてその所在を求めながら、所在が明らかになったものについて、その内容を調査し、データベース化して研究者の活用の便を図ることを最大の目的とする。

多くが国立・公立の図書館や大学図書館、私立の博物館や研究機関に所蔵されている小袖雛形本とは異なり、肉筆雛形本はその大部分が呉服関連企業や個人等に分蔵されていると考えられる。しかしその一方で、その所在（所蔵者）を明らかにした研究や、これをまとめた文献はまったく見当たらない。

研究対象とされることがこれまでほとんどなかった肉筆雛形本については、その内容や呉服注文における使用実態、描かれた小袖・着物図案の様式変遷と現存遺品との対応関係など、今後探求すべき課題が山積しているが、これらの解決には、まずは肉筆雛形本の所在を明らかにし、それぞれの内容に関する情報収集が、最初に必要となる。小袖雛形本のような解題や復刻本が皆無だからである。

本研究は、江戸時代後期から明治時代中期に至る女性の小袖・着物の様式変遷を解明するための不可欠な資料と考えられる肉筆雛形本の現所在を明らかにし、それらの具体的内容を含めてデータベース化して公開することを到達目標とする。これにより、肉筆雛形本自体の研究が大幅に進展することに加え、江戸時代後期及び明治時代の女性の小袖・着物研究に肉筆雛形本が広く活用できるようになる。

本研究は、上記の理由により、近世小袖服飾類の研究にとって、現存服飾資料や小袖雛形本に次いで重要な資料であると考えられる肉筆雛形本を中心に、これと類似した形状と意匠表示形式をとる型染見本帳、及び小袖の注文に際して地色の決定に用いられたと考えられる色見本帳の所在を明らかにすることを第一の目的としている。具体的には（１）先行研究において存在が知られている資料にはどのようなものがあり、どこに所蔵されているのかを明らかにする。（２）既知の資料以外の諸資料の所在を、文献目録、所蔵品目録等から明らかにする。（３）新たに所在が明らかになったものについて、その内容を明らかにする。（５）最終的にすべての資料を種別に分類し、資料名称と所在、内容について、研究者の活用に適した形にデータベース化することを目的としている。

３．研究の方法

先行研究や家政学文献資料、歴史学文献資料、及び本研究申請者の近世日本染織品・服飾品に関する調査・研究によって、肉筆雛形本を中心に型染見本帳・色見本帳等の所蔵が明らかになっている公的図書館・大学図書館・個人について、（１）所在ごとに収蔵されている上記諸資料の存在状況の詳細と、それぞれの具体的内容を調べた。（２）また染織文化財や服飾文化財を所蔵する国内外の博物館・美術館のアーカイブやデータベースから、上記以外の資料を探し出し、新たに所在が明らかになったものについても、その資料の内容を明らかにした。（３）最後に、すべての資料を種別に分類し、資料名称と所在（所蔵者）、内容について、研究者の活用に適した形にデータベース化した。

肉筆雛形本は、版形は小袖雛形本と殆ど同じで、各ページに模様を肉筆で描く。模様表示の形式は版本である小袖雛形本に類似するが、制作し使用したと推測される呉服商や染物屋の名は

記されているものの、ほとんどが地色や加飾技法についての記載を持たない。

制作年代についての記述はないが、収録されている模様の特徴から、18 世紀末以降に多く制作されたことが分かり、版本の小袖雛形本の刊行が行われなくなった江戸時代後期の小袖様式の研究にとって重要な資料といえる。肉筆雛形本に地色の記載がないことについては、これらと近い時期に成立したと考えられる色見本帳が、その任を担っていたと考えられる。

型染見本帳は、友禅染や摺匹田・刺繍などで加飾した高級呉服を購入できない中流町人女性が、型染で模様を表した小袖を注文する際に、版本や肉筆の小袖雛形本同様、模様を選ぶために使用したものであり、「小紋」や「中形」と呼ばれる模様を摺り表した和紙、あるいは模様を染め表した裂を張り込んだ冊子である。肉筆雛形本同様、小袖の注文に際しては色見本帳とともに用いられる。

肉筆雛形本や型染見本帳・色見本帳も、版本の小袖雛形本同様の用途に加え、小袖の制作に直にかかわる呉服屋において制作されていたことから、実作品に直接繋がる情報が得られる点で、近世小袖服飾類の研究にとって不可欠である。

肉筆雛形本は、公的機関に所蔵されているものもあるが個人蔵が多く、また型染見本帳・色見本帳についてはほとんどが個人蔵であり、所蔵していることを公開していないものがほとんどである。本研究では肉筆雛形本の所在を明らかにすることを研究の大きな目的としているが、「学術研究助成基金助成金」（基盤研究（C））・課題番号 16K00797「小袖雛形本・型染見本帳・色見本帳等の所在及び現存状況に関する研究」（2016～2018）の研究過程においてその所在の一部情報を得た型染見本帳・色見本帳についても、本研究内において新たに存在を見出すことを第二の目的としている。

４．研究成果

（1）肉筆雛形本の所在とその内訳

本研究における調査で所在が明らかになり、その内容についても知ることができた肉筆雛形本は 161 点である。本報告書においては、紙数の関係でその詳細は示せないが、江戸時代後期から明治時代中期にわたる資料群である。肉筆雛形本は、博物館や図書館に属するものよりも個人蔵になるものが多いため、所蔵していることを一般に公表することを認めている所蔵者と認めていない所蔵者がある。また、所在を公表することを認めていても一般の閲覧には供していない所蔵者もあり、ボストン美術館、Ｊ．フロントリテイリング史料館、多くの個人蔵などがこれに当たる。

（2）型染見本帳・色見本帳・染色見本帳について

本研究における調査で所在が明らかになり、その内容についても知ることができた型染見本帳は 40 点ほど、色見本帳は 20 点ほど、染色見本帳は 10 点ほどである。紙数の関係でその詳細は示せないが、江戸時代後期から明治時代中期にわたる資料群である。これらもまた博物館や図書館に属するものよりも個人蔵になるものが多い。

肉筆雛形本同様に呉服注文（受注）の際に仕様決定の手がかりとすることを目的として制作され使用されたものであることは、染屋の屋号や主人の名前、顧客に対する口上書などによって知ることができる。

（３）まとめ・今後の課題

本研究において、現存する肉筆雛形本については管見に入るほぼすべての所蔵を明らかにできたが、研究期間が新型コロナウイルス感染症の発生・流行期と重なってしまったこともあり、通常の社会環境下であれば、更に多くの成果があったと考えられる。その用途から、肉筆雛形本と同時期に使用されたと推測される型染見本帳や色見本帳についても、可能な限りその所在を明らかにし、画像データなども得ることができたが、新型コロナウイルス感染症によって影響を受けたことは同様である。

研究の過程で、江戸時代後期に使用が始まった肉筆雛形本・型染見本帳・色見本帳が明治時代の中期頃まで広く使用されていたことがわかり、さらに実際の染裂を貼付した染物注文帳もこの時代に出現していたことが分かった。今後は、デパートなどが呉服を取り扱う以前の明治時代注記頃までの呉服注文（受注）が、これらの冊子類を具体的にどのように用いて行われていたのかを明らかにしたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 長崎巌	４．巻 第4号
２．論文標題 友禅染掛幅の歴史と存在意義　－共立女子大学博物館蔵「文読む美人図友禅染掛幅」を手掛かりとして－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 共立女子大学博物館紀要	６．最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長崎巌	４．巻 第23号
２．論文標題 日本服飾における、社会階層と繊維素材・加飾技法・装飾の方向性の関係について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 板橋区立郷土資料館紀要	６．最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長崎巌	４．巻 第69号
２．論文標題 伝益田元祥所用白地横縞模様木綿帷子（個人蔵）に関する一考察　－安土桃山・江戸時代初期における上層武家の木綿使用の実態－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長崎巌	４．巻 第29号
２．論文標題 近代女性着物における洋花模様流行の実態とその背景	５．発行年 2023年
３．雑誌名 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 15 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 長崎巌
2．発表標題 江戸時代の呉服注文と雛形本　－雛形本の役割とその変遷が意味するもの－《基調講演》
3．学会等名 国際日本文化研究センター（シンポジウム・招待講演）（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 長崎巌	4．発行年 2021年
2．出版社 東京美術	5．総ページ数 192
3．書名 日本の婚礼衣裳　寿ぎのきもの	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関